

平和を未来につなげよう

78年前の夏、日本は終戦を迎えました。石岡市から戦地に赴いたまま帰らなかった人も大勢おり、家族は大切な人を失った悲しみを抱えながら生きてきました。

今回の特集では、この悲劇を二度と繰り返してはいけないという思いから、取材にご協力してくださった遺族のインタビューを紹介します。



戦争によって奪われた



家族のかけがえのない日々

(左) 写真をもとに描かれた父・安男さんの肖像画
(右) 母・シノさんと姉・美千子さんの写真 (いずれも亀田幸子さん提供)



▲幸子さんの父・安男さんの写真

幸子さんの父・安男さんは東京都北千住で消防署員として働いていました。当時、都内は戦況の悪化にともない、空襲に見舞われることが度々あり、安男さんは家族を連れて実家のある八郷地区へ疎開しました。その後、出征した安男さんは陸軍において伍長(※1)を務めていましたが、昭和20年2月2日、フィリピン・ルソン島において33歳の若さで

早すぎる別れ



インタビュー

八郷地区遺族会会員
亀田幸子さん (79)

昭和18年10月13日生まれ。東京都北千住出身。石岡市在住。母・シノさんの跡を継ぎ、八郷地区遺族会会員としてとして活動する。現在の楽しみは大学生の孫らと一緒に食事をする事。

戦死しました。異国の地で亡くなった安男さんの遺骨は家族の元へ届けられず、戦死を告げる通知だけが届いたそうです。
(※1) 伍長：軍隊の階級。軍曹の下、兵卒の上に位置する。

父の顔を知らずに

幸子さんには2歳年上の姉・美千子さんがいました。美千子さんの幼少期の写真は何枚も残っていますが、幸子さんの写真は1枚も残っていません。娘たちに深い愛情を注いでいた安男さんでしたが、戦況が不利になるにつれて写真を撮る余裕がなくなっただけで思われず。娘の成長を見届けられなかった安男さんの無念が伝わってきます。

母・シノさんは安男さんの死後、義父（安男さんの父）から田を分けてもらい、稲作を始めました。稲作を手伝っていた姉・美千子さんは、生産された米を抱えて染谷から石岡駅に向かい、電車で北千住の市場まで行って売ったといひます。女性だけの世帯ということでも悔しい思いをすることもありましたが、シノさんは一言も弱音を吐くことはなかったそうです。



▲幸子さんの母・シノさん

幸子さんは中学を卒業後、鉄工所でミシン針の検査の仕事に就き、力の限り働き続けてました。疎開してきた人に対する差別が残っていた反面、中学進学时に近所の人から自転車を貸してくれるなど、地域の人から力になってくれることもたくさんあったといひます。「こんなに住みやすいところ

はないね。他の地域に行きたいとは思わないよ」と幸子さんは今でも考えています。



▲戦後、牛を飼っていた美千子さん（左）とシノさん（右）

自由を謳歌できる社会で

幸子さんは、戦没者の子らに支給される特別弔慰金を大学生になる孫に渡しています。

「平和な社会で好きなことができるのは、じいちゃん（安男さん）たちのおかげだよ。じいちゃんのことを忘れないでね。つて孫には伝えていません。戦争をやって良かったなんていう人は一人もいない。私たちは、戦時中に起こった出来事を後の人たちに伝えていなくてはいけないね」

幼くして父を失い、戦後、数々の苦勞を乗り越えてきた幸子さんはこう話してくれました。

国際連合が定めた国際平和デーに向けて、以下のメッセージが発出されました。この機会に平和の大切さや尊さ、私たち一人ひとりの責任を考えてみませんか。

国際平和デー（2023年9月21日）100日前メッセージ

9月21日の「国際平和デー」まで残り100日となりました。

「国際平和デー」は、全ての国と人々の共通の理想である国際平和の実現を記念・推進するために国連が定めた日であり、平和の大切さや尊さを考える重要な一日です。この「国際平和デー」を強く推し進めておられるアントニオ・グテーレス国連事務総長のリーダーシップに、改めて心から敬意を表します。

今年の「国際平和デー」のテーマとして、「平和のための行動：#GlobalGoals に対する私たちの野心」が掲げられ、私たち一人ひとりが、個人及び集団として平和を育むために行動する責任を認識することの大切さが呼び掛けられています。

平和首長会議では、今年も「国際平和デー」の趣旨に賛同し、166か国・地域の8259の加盟都市に対して、広島・長崎に原爆が投下された8月6日と9日に加え、9月21日の「国際平和デー」に、市民一人ひとりが平和への願いを共有し、その実現を祈念する行事を開催していただくよう呼び掛けます。

ロシアによるウクライナへの侵攻が長期化し、戦禍により罪のない多くの市民の命や日常が奪われています。このような現状を受け、平和首長会議では、市民の平和な暮らしを守る責務を負う自治体の首長から成る組織として、あらゆる暴力を否定する「平和文化」を振興し、市民社会に根付かせることで、為政者が対話を通じた外交政策を目指す環境づくりをより一層推進していきたいと考えています。

本日から「国際平和デー」までの100日間、改めて、各加盟都市が心をつにし、「平和文化」を築くための市民の取組を着実に推進し、世界中の市民と共に、核兵器の廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向けて歩みを進めましょう。

2023年6月13日 平和首長会議会長 広島市長 松井 一實

石岡市の平和へ向けた取り組み

被爆体験伝承者講話

昨年12月に園部中学校で行われた講話では、公益財団法人広島平和文化センターの岸田英里さんを迎え、原爆によってもたらされた被害についてのお話を聞きました。自らも被爆2世である岸田さんは、原爆投下時に17歳だった竹岡智佐子さんの体験を聴き取り伝えるという「被爆体験伝承者」として活動しています。講話はオンラインで市内全中学校に配信され、2年生全員が視聴しました。



▲園部中学校で行われた被爆体験伝承者講話の様子

中学生平和大使を派遣

平成27年度から市が実施している「平和大使派遣事業」。市内各中学校から生徒代表者2人が広島市や長崎市を訪れ、平和について学びます。

令和4年度に広島市へ派遣された石岡中学校2年（当時）の小吹真斗^{まこと}さんは、報告会において「二度と同じ過ちを繰り返さないために僕達ができることは、広島を訪れて分かったこと、知ったことをいろいろな人に伝えて、自分でもずっと忘れないようにすることです」と平和の実現に向けた目標を話してくれました。

今年度の平和大使の皆さんは長崎市を訪れる予定です。



▲令和4年度石岡市中学生平和大使の皆さん

核兵器廃絶平和都市宣言

本市では以下のとおり「核兵器廃絶平和都市宣言」を宣言しています。

私たちは、戦争のない平和な社会を強く望んでいます。家族や親しい友人と笑顔で過ごす日々そんなかけがえのない生活を一瞬にして奪ってしまう戦争の悲劇なかでも広島・長崎に落とされた原子爆弾の恐怖を私たちは決して忘れてはなりません。

しかし、この「平和への想い」に反し、今日も世界のどこかで人が傷つき、命を奪われ、核兵器の脅威におびえています。今、私たちは戦争という名の“暴力”を否定するとともに、核兵器を持つ国々が、地球規模の悲劇をもたらす可能性のある武器を使用することなく廃棄することを求めます。

私たちを育ててくれるこの石岡市の自然と恵み豊かな大地を、次の世代を担う子どもたちへと引き継いでいくために、そして、私たちの声が、全世界の人々と結びつき、やがて大きな「平和への想い」へとつながっていくことを願い、ここに「核兵器廃絶平和都市」を宣言します。

